

〔論 文〕

貧しい者の幸い 天の御国はその人たちのもの —マタイ 5章3節の意味—

池淵 亮介

I. 序

Μακάριοι οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι, ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。

(新改訳3版)

イエスは一体、何を言おうとしたのだろうか。マタイ5章3節は、その一つ一つの言葉の理解の難しさを抱えるゆえに、全体としても、この一節の理解が不明瞭になっている。なにより不明瞭なのは、この節が「貧しい」と「幸い」、という一見相反する概念を組み合わせているような響きがあるからである。¹

諸般の事情で、すべての語句を詳細に取り扱い論じることが困難であると思われるので、本稿では、翻訳上の課題に触れた後、「貧しい者たち“οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι”」と「天の御国“ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν”」の2つの語句を取り上げ、この5章3節の指し示す意味内容とその理解について論じる。

・翻訳上の課題

現状の日本語訳では、“πνεῦμα”と「心」の意味範囲の違いと、“πτωχός”「貧しい」の意味の不明瞭さの2点が課題であると思われる。

ひとつめは、原文の“τῷ πνεύματι”の訳である。新改訳では「心の」と訳されているが、直訳では、「霊の」「霊において」となる。²日本語の

代表的諸訳では、いずれも「心の」と訳出されているが、英語のNKJは“in spirit”、TEVは“spiritually”と訳出されており、「精神」といったニュアンスに近い形となっている。日本語における「心」という言葉は、「精神活動の元となるもの、人格を決定するもの」という定義をも含むが、他にも広く、気持ちや感情、思慮分別や感性、根底にある考えなどと同じ意味でも使われる言葉である。ゆえにその使用範囲はかなり広い。それに対し、日本語の「霊」という言葉は、「心の働きをつかさどる精神的実体のこと、また肉体を離れても存在するもの」という意味の言葉として使われており、より「心」よりも意味範囲は狭い言葉であり、より根源的なものを表す語として使用されており、³より“πνεῦμα”の意味に近い。よって、この“πνεῦμα”を考えるにあたり、品性や情感の意味を含む日本語の「心」という言葉を用いて考えていくよりも、原語の“πνεῦμα”のもつ意味に近い、さらに根源的なものを表す「霊」という言葉のほうが適切である⁴と考える。

また、この節の後半部が、天の御国という霊的な祝福について述べられているわけであるから、一節の意味のまとまりを考えても、「貧しい」という不足状態に対し、霊的な祝福が与えられるというわけであるから、前者は、心的な不足というよりは、むしろ霊的な不足状態として語られる方がより原意に近い形となると考える。

次に“πνεῦμα”を「霊」ととらえるとそれを人間の「霊」ととらえるか、聖霊を意味する「霊」ととらえるか二つの理解の可能性が原語からは出てくる。これについては、“τῷ πνεύματι”の与格をどの意味に取るかということにも関わってくる。山上の説教は、無論ペンテコステ以前の出来事であるので、これを聖霊を意味するものとする場合、時間的な不都合が出てくる。またペンテコステ以前から聖霊による働きかけはあったことを加味しても、このことばが「その聖霊によって」と解されるのならば、どれだけその場にいた聴衆に意味のあるものであったのかという有効性について疑問が生じてくる。よってこの与格を、その動作主に関係する「手段の与格」⁵「～によって」の意味に取るよりも、「関係の与格」⁶

「～に関して」の意味にとり、“πνεῦμα”は、人間論における「霊」を指すという解釈をとるのが適切であろうと考える。

訳語の課題にあたってのふたつめの“πτωχός”「貧しい」については、以下、論を進めるにあたってその意味を考えていく。

II. 「貧しい者たち」“οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι”の意味

ルカでは、単に「貧しい者」と書かれているが、マタイでは「心の貧しい者」となっている。多くの学者は、これが、イエスの言及したことが物質的な貧しさであるとの誤解を避けるために、マタイが元になった資料に「心の(τῷ πνεύματι)」を付加したと考えている⁷。本稿では“οἱ πτωχοὶ”の語を経済的、精神的、霊的と切り分けて限定して考えるというより、意味の重なり、広がりという点、統一的な見方であらえている。ここでは、ギリシャ語で表された“οἱ πτωχοὶ”の意味を探ると共に、ヘブル語の「貧しい」を示す語の語意と、その意味の旧約からの変遷について取り上げることで“οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι”の全体としての意味を考えることにする。

新約聖書では「貧しい」を表すのに“πένης”と“πτωχός”の二通りのギリシャ語が用いられており、ここでは、後者の“πτωχός”が使われている。

“πτωχός”は、単なる財産の不足を示す“πένης”とは違い、全く財産を持たず、生存に必要な物資さえ不足している状態であり、「極めて貧しい」状態を表す。むしろ、全く何も無い完全に無一物の人を言う形容詞である⁸。いわば、「物乞い」をしなければならないほどの欠乏状態にある人である。すなわち、単なる欠けではなく、自立存在が難しいほどの欠乏状態にあり、それゆえ他者にすがるほかないほどの「貧しさ」である。その意味において「貧しい者“οἱ πτωχοὶ”」とは、「物乞い」とも訳し得るほどの困窮状態の人のことである。

「貧しい“πτωχός”」の言葉の新約における用法の分類を見ると、その

指し示す意味は主に2つある。ひとつは「施し」の対象となる経済的困窮者を表す意味であり、もう一つの意味は「福音宣教」の対象となる「貧しい者」という意味である。

A. 「施し」の対象となる経済的困窮者の意味

以下が、「施し」の対象としての用法の例である。

マタイ 26:9 この香油なら、高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」

ヨハネ 13:29 ユダが金入れを持っていたので、イエスが彼に、「祭りのために入用の物を買え」と言われたのだとか、または、貧しい人々に何か施しをするように言われたのだとか思った者中中にはいた。

カナンに定住したイスラエル人は、その氏族制度のおかげで、氏族社会内部の平等を保つ可能性があった。しかし、定着生活への移行と王国建設に伴いイスラエルにも社会的な不平等と従属関係が生まれた。イスラエルの律法には、貧しい者が絶えることはない（申命記 15:11）という認識の元にこの問題に対処しようとし、土地を持たない人々に対する保護規定が設けられている。例としては、不当に高い利息を禁じるもの（出エジプト記 22:25-26）や、安息年における負債の免除（申命記 15:1以下）、3年の終わりごとに貧者に収穫の10分の1を与えること（申命記 12:28-29）¹⁰などである。

イエスの時代には、「施し」は、「祈り」と「断食」と共に、宗教的な善行とされていた。今日のような社会福祉制度がなかった古代ユダヤ社会では、社会的弱者の生活は、人々の自発的な寄付によって成り立っていた。イスラエルの民は、上に述べた律法から、施しの必要性を知っていた。それゆえ、「貧しい者」という言葉が、施しの対象としての意味をもって、使われていたと見られる。¹¹

B. 「福音宣教」の対象となる「貧しい者」という意味

以下が、「福音宣教」の対象としての用法の例である。

マタイ 11:4 イエスは答えて、彼らに言われた。「あなたがたは行って、自分たちの聞いたり見たりしていることをヨハネに報告しなさい。11:5 目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツアラアトに冒された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている。11:6 だれでもわたしに近づかない者は幸いです。」

ルカ 4:18 「わたしの上に主の御霊がおられる。

主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油をそそがれたのだから。

主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、4:19 主の恵みの年を告げ知らせるために。」

この箇所は、イザヤ 61:1 引用より、貧しい人々に福音を伝えるメシアを歌ったものである。イエスの宣教は、直接「貧しい者」に向けられたイザヤの約束の成就として取ることができる。イエスは、イザヤ 61 章の言葉を用いて、「貧しい者」への宣言をしたと言える。¹²

エレミアスは、この躓きについて、復活前の躓きと、復活後の躓きの二つがあると論じている。復活後の躓きとは、イエスが十字架にかかって呪われた者の死に方をしたことであって、復活前の躓きとは、6 節の直前の、「貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている」こと¹³にあったと述べている。

イエスが「貧しい者」に救いをもたらした事実となると、こちらは実際のところ最大の躓きの原因であった。なぜなら、当時の社会にあって、この「貧しい者」として列挙されている者たちは、救いから遠い者たちとして認識されていたからである。

マタイ 11 章 6 節において、この「貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている」ことに、躓かないものは、幸いであると言われている。つまり、この貧しい者たちには福音と神の救い、赦しはふさわしくない、と思っていた者たちは、このイエスの宣教に躓いたのである。そして、これに躓かなかった者たちとは、この「福音が宣べ伝えられている」対象そのものである「貧しい者」たちであったと言える。

律法学者たちが躓いた理由は、その救済の対象者が自分たちでなく、「貧しい者」たちであったからである。またもうひとつの理由は、彼らが思い描いていた神の国の概念が、イエスの述べている神の国概念と違ったからである。彼らが躓いたのは、イスラエルの遠い先祖以来の歴史を通して培われ、民族の中に定着した神の国概念が、異邦人支配からの解放をもたらす、ダビデ王国の再現という輝かしい願望という神の国概念に他ならなかったからである。¹⁴

C. 旧約からの包含的意味

新約における「貧しい “πτωχός”」を理解するためには、旧約聖書、そしてユダヤ教における概念によって生じた意味にふれる必要がある。それは、マタイ福音書が執筆された年代にあって、「貧しい者」の語に、旧約からの「貧しい」に当てられているヘブル語の意味が含まれていることは当然考えられるからである。

70 人訳では、“πτωχός” は、5 つのヘブル語を表すのに使用されている。しかし、そのうちの 4 つ פנין、פנין、פנין、פנין は、訳語に “πένης” も用いられており、単純に対応関係を論じるのは難しい。これは、二つの語の使い分けがなされていないというよりも、言語のもつ意味範囲の重なりがあるからであり、当然のことと考えられる。もうひとつの פנין は、訳語に “πτωχός” のみが当てられているが、この語の使用例は多くはない。5 つの中では、פנין פנין が、慣習的な “πτωχός” の意味に近く、その意味は、施しを求める者、乞食の意味である。また、それは一般的に非常に

貧しい者やホームレスの者に対して使われている。¹⁵

詩篇においては、自分の問題、または神の問題のために抗議の叫びをあげる貧しい者 (ענין ירמיהו) という表現は、祈る者が自分を指すのに用いる句となる。貧しい者は、不正に苦しむ者であり、彼らが貧しいのは、神の法をさげすむ他者が原因である。それゆえ、無力で、謙虚な神に祈る者 (自分の必要のためだけでなく、意識の中で、最終的には、神の栄光への疑問のため) という意味になった。それは、自己の認識を通して、世代から世代へと、貧しい者によって祈られる個人的な嘆きと感謝の詩篇となった。そして、「貧しい者」は、神へと大きな欠乏を祈り、助けを求める者という意味を含む特別な内包的意味へ徐々に発展していった。¹⁶ この貧しい者たちの、「求める」「乞い願う」という意味の要素が原語の意味の変遷として強まってきたということが言える。

こうした宗教的意味内容から「へりくだった一敬虔な者」を表す ענין の概念が生まれた。また、捕囚の苦難により、民全体が貧しい者になり、苦難から救い出すという神の約束が彼らに与えられる。こうした終末論的方向付けの中で、貧しい者という概念を用いて、新約時代のユダヤ教、特に反体制集団は、自分たちが選ばれた共同体であるという彼らの自己理解を表現した。¹⁷

イスラエル民族にとって土地はヤハウェの所有権に属し、ヤハウェによって民全体に与えられたものであった。経済的困窮者である貧しい者は、自分たちの持つ、先祖伝来の権利 (土地) を奪われた者、手放さざるを得なくなった者となる。その意味で「貧しい者」に「土地を失った者」という意味が付加されてくる。また歴史的背景を考える時、イスラエルの民が、捕囚後の民として、選ばれた共同体としての自己理解を膨らませていったことを考えると、この言葉の意味の変遷が理解できる。イスラエルの民は捕囚によって土地を奪われた者であり、そして、そこからの救済を神に乞い願う、「へりくだった敬虔な者」としての自己理

解をしたと考えられるのである。その意味でイエスの時代のユダヤの民の自己理解は、自らこそが、その「貧しい者」に当たるものとしての國民意識、自己理解をしていたと考えられる。

この意味を踏まえて、もう一度、「福音宣教」の対象となる「貧しい者」を考えると、より一層イエスの宣教は彼らにとって躓きであったという事実がわかる。なぜなら、イエスは、自らが救いにふさわしい「貧しい者（敬虔な、へりくだった者）」と思っていた律法学者やパリサイ人を退けられ、当時宗教的、社会的に抑圧され、救いから遠いものと思われていた者たち、罪人、社会的に抑圧された「貧しい者」にこそ近づかれ、彼らにこそ救いを宣言したからである。

これを考える時、イエスの発した「貧しい者は幸いである」との言葉は、自らがふさわしいと思っていた者たち（律法学者、パリサイ人）を退け、ふさわしくないと考えていた者（罪人たち、困窮者たち）を身に引き寄せる、大きな皮肉を含んだ言葉ともとれるのである。

神の御前には、自らのうちに寄るすべがない困窮者の神に対する飢え渴きこそがへりくだりであり、「貧しさ」である。ゆえに、「οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι」貧しい者」とは、「自らのうちに寄る術をもたない破綻状態にあって、神にすがろうとする者」のことである。この意味を鑑み、訳語を考えると、「οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι」（心の貧しい者）」とは、その意味合いにおいては「霊においての物乞い」とするのがよいのではないかと考える。

Ⅲ. 神の国とは何か ―その定義と意味範囲、性質について―

マタイ5章3節の釈義を試みるにおいて、ここで「神の国」の全体像を論じるのはあまりにもテーマが大きいため、ここでは、神の国の定義、意味と、その構成員という点に絞って「神の国」はどのような者の国か、という視点から論じることとする。マタイがそれを「天の御国」と記し、

他の福音書記者は「神の国」と記しているが、指し示しているものは同じである。後期ユダヤ教の用語法では、神ということばは天ということばに置き換えられており、これは十戒の第三戒を意識するユダヤ人の婉曲表現とされる。

「天の御国 “ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν”」の「天の」“τῶν οὐρανῶν”は、人間を超越している神的なものを表す。¹⁸ 複数形が使われているのは、ヘブライ語の “מַלְאָכִים” の翻訳から 70 人訳を通して新約の言語慣用の中に導入されたものであろうことが予想される。ヘブル語における複数形の使用には、一般に「尊厳の複数」と言われるものがあるが、ト・レイフ・ポーマンは、ヘブル思想の複数形使用による主な強調表現の分類を挙げ、「神」については、崇高性および支配としての複数形とし、「天」においては、空間的な広がりを表示する普通複数形と分類している。¹⁹

A. 「王国 (βασιλεία)」の意味

「王国 (βασιλεία)」を考える時、今日のわれわれが想定するその言葉の意味は、その国の国土、王がその上に権威をふるう領土であり、その国に属する国民である。²⁰ しかし、ヘブル語の「王国 (מַלְכוּת)」および、ギリシャ語の「王国 (βασιλεία)」も、共に本来の意味は、王の行使する王位、権威、統治権である。ゆえに、「王国」は、第一義的には、支配する権威であり、王の統治権を指している。²¹ 「מַלְכוּת (王国)」という名詞は「מָלַךְ (王が支配する)」という動詞に由来し、一定の領域、場所というより、神が王として支配するという、神の働き (活動) そのものに注目させた言葉である。ゆえに、その「王国」の意味とは、「領土」といった、静的なものではなく、動的なもの、行為であり、つまり、それは、王権、統治を意味している。²²

ジョージ・E・ラッドは、この「神の国」の意味を述べつつ、その聖書箇所により、3つの意味が提示されていると言っている。²³

- (1) 神の国を神の統治を意味するものとして。
- (2) 神の国を、そこにわれわれが今入って、神の統治の祝福を味わう

ことのできる領域として。

(3) 主イエスキリストの再臨と共に始めてやってくるもので、その時にわれわれがそこに入り、神の統治の祝福を完全に味わうことのできる未来の領域として

そして、ラッドは「神の国」は聖句によって三つの異なった事柄を意味し、それらすべてをひとつに包括的解釈に適合させるようにする必要性を論じている。

もうひとつ、この「王国 (βασιλεία)」を考える際に、考えなければならぬことは、そこで用いられる「王国」の意味は、イスラエルの王国としての意味であり、イスラエルの「מְלִכּוּת (王国)」とは、どのような王国か、ということである。イスラエルの王国とは、今日の社会における近代国家としての国ではない。また、中世のような王政が敷かれる王国ともまた異なるということである。

ここで考えるのは、イスラエルの「王国」とは、「家 “בֵּית” 的な「王国」である、ということである。そもそも、イスラエルで王政がとられたのは、士師時代が終焉した後のサウル、ダビデ、ソロモンの時代である。そして、そこで言われた「王国」とは、その当時の周辺国家が敷いていたような王国ではない。²⁴

特に、メシアとの関連で語られているのは、一般にダビデ契約といわれる2サムエル記7章13-14節であろう。

2サムエル記 7:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。7:14 わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。

ここで言われているのは、直接的にはダビデを王とするイスラエルの国が建てられることが述べられ、また神殿が建てられることも含めた文脈で語られている。そして、ダビデの家系の祝福と、その王国の繁栄が

言われている。しかし、ここではそれだけではなく、やがて来るべきメシアと、その王国のことも預言として語られている。

そもそも、イスラエルという民族は、アブラハム－イサク－ヤコブと連なる、ヤコブ（イスラエル）から生まれ出た血縁関係にある者、またその「家 ²⁵”בית”」につながる者たちのことである。その者たちが、主なる神によって「王国」とされるわけであり、そこには「家」の要素が強い色彩を帯びる。

また、契約の観点から見ると、イスラエルの民族は、「神の契約に共に預かる者」としての「王国」という要素がある。無論、その契約とは、アブラハム－イサク－ヤコブ（イスラエル）に連なる契約である。

これを鑑み、「神の王国」を考えると、そこには、「神の契約に共に預かる者」としての「王国」という意味、そして、その「契約の民」は、その契約に預かる「ひとつの家」という意味がその概念の土台に含まれていることがわかる。よって、「神の国」とは何か、という定義を考える時、この契約の民イスラエルの「王国」が、その契約に預かる「ひとつの家」としての概念を含んでいると考えられる。この意味において、「神の国（王国）」は、「神の契約に預かるひとつの家²⁶」という意味があると言える。

B. 神の国はどのようなものの国か

マタイ5章3節は、「心の貧しい者」が、天の御国の構成員であることを述べている。これを考えるにあたって、天の御国の構成員は誰か、どのような者が神の国に入るのか、他の聖書箇所を示されているものを以下に挙げる。

- ① 義のために迫害されている者の国（マタイ 5:10）
- ② 新しく生まれた者、再生された者の国（神の子とされた者の国）
（ヨハネ 3:3）
- ③ 義が律法学者やパリサイ人の義にまさる者の国（マタイ 5:20）

- ④ 父のみこころを行う者が入る国（マタイ 7:20）
- ⑤ 子供のように神の国を受け入れる者の国（マタイ 19:13）
- ⑥ 自分を低くする者の国（マタイ 18:3-4）
- ⑦ イエスの名のためにこの世のものを捨てる者の国（マタイ 19:23-26, 19:29）
- ⑧ 父なる神と御子を信じる者の国（ヨハネ 3:16、5:24、17:3）

神の国には、神の支配、統治が及んでいる。それゆえ、神の国がその人の内にあるということは、構成員に神の支配統治が及んでいるということである。生まれつきのままの人間は、善悪を神のみしか決めることができないものであるのに、それを自分自身で判断する者であり、あたかも自分が自分の主人、神になったか²⁷のように行動する人間である。これが、肉の人の姿である。

しかし、神の国の構成員であるその人の内に神の支配が及んでいるということは、自分が自分の主人となるのではなく、自分の王座に神をお迎えし、自分はそこから降りて、わきに退くことを意味し、その構成員とは、神が主人である人間、つまり、新しく生まれ変わった人間、イエスキリストの霊、御霊を内にいただいた人間のことである。それゆえ、神の子である。

このことを鑑みると、マタイ 5:3「天の御国はその人のものだから」、という言葉はまた、「神の支配が、その人のうちに現される」という意味を含んでいる。神の国に属する者は、その人格のうちに、神の支配が現れる。その品性は、義であり、みこころを行う。しかし、神の国に敵対するこの世から迫害されることもその証となってあらわれる。神の国に属する者はこの世に固執せず、自分を低くし、子どものように神の国を受け入れ、父なる神と御子イエスを信頼する。そのアイデンティティーは、神の子であり、その者は、神の家族に招き入れられているのである。

C. 「人にはできないが、神にはできる」性質

神の国は、新しく神の子とされた者たちの国であり、その意味では、神の国とは神の家族であるともいえる。その者たちは、子どものように自らを低くして、神の支配と統治を自らのうちに歓迎した者たちである。「霊においての物乞い」でなければ、神の支配、統治（つまりは神の国）を自らのうちに歓迎することはできない。

つまりその者の内には、神の支配による義が与えられ、神の御心がなされていく。その者の心は天の父なる神様と子なるイエス様を思う心であり、この世のものに固執することより、神に従うことを選ぶ。神の国に属する（救われる）ことは、人の力によってはできないことであり、それは神の力によってなされる。神の国には、信仰を通して招き入れられるのであって、信仰は神から与えられる。その信仰とは、神から指し伸ばされた救いの手段を受け入れ、自分を救ってくださる方に、自らを委ねて信頼することを意味する。

ゆえに、「天の王国 “ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν”」とは、神の王権、支配、統治であり、その内実は、三位一体の神と、新しく神の子とされた者たち（つまりは、その神の支配を受け入れた者たち、その神の契約に共に預かる者たち）で構成される神の家族の総体であると言える。²⁸

IV. 福音書中に見る「貧しい者」とイエス

A. 福音書に見られる「貧しい “πτωχός”」者たち

ここでは、マタイ 5章3節とその並行箇所（ルカ 6章20節）に記される「貧しい “πτωχός”」という言葉が使用されている箇所にあてられる。以下でマタイ、ルカ両福音書中の「貧しい “πτωχός”」者たちを見ていく。この後の使用されている箇所はいくつかあるが、この後が直接的に出てくる人物または人物像を形容詞として修飾している箇所は、レプタ銅貨を献金したやもめ（ルカ 21:3、マルコ 10:42,43）の箇所と、イエスの話の中では、金持ちとラザロの箇所（ルカ 16:20,22）、そして、宴会に招かれ、

それに応答した貧しい者（ルカ 14:13,21）の箇所である。

・ 献金した貧しいやもめ ルカ 21:3 マルコ 10:42,43

ここで 強調されているのは対比であり、4 節で、「あり余の中から献金を投げ入れた」者たちに対し、「乏しい中から、持っていた生活費の全部を投げ入れた」やもめの姿が語られている。

直前のルカ 20 章 47 節²⁹では、見栄を飾り、「やもめの家を食いつぶす」律法学者たちのことが語られており、やもめが当時の宗教社会にあって、虐げられ、搾取されている存在であることが言われている。そのやもめがその乏しさの中にありながら、神にすがる思いで持っていた生活費の全部を投げ入れた姿が描写されている。これまでふれてきたこととあわせて考えると、貧困者の神へ抛りすがる姿がより一層浮き上がってくる。

・ 金持ちと貧しい者ラザロ ルカ 16:20,22

この金持ちとラザロの話の前、16 章 14,15 節³⁰において、金の好きなパリサイ人たちに対し、彼らを「人の前で自分を正しいものとする者」であると、彼らの「心をご存じ」であり、神の前でそのようなものは、憎まれ、嫌われることが言われている。

ここでの話は、金持ちと貧しいラザロの死後のことに焦点が当たっている。生前のラザロの貧しさは、「金持ちの食卓から落ちるもので腹を満たしたいと思っていた」ほどであった。その思いで、金持ちの家の門前に寝ていたのであろうことが予想される。「貧しい “πτωχός”」が、いわば「物乞い」をしなければならぬ困窮状態であることの例である。ルカ 16 章 25 節のアブラハムの発言は、マタイ 5 章 3 節の並行箇所であるルカ 6 章 20 節の反対のテーゼ、24 節と関連が見られる。

ルカ 16:25 アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。』

ルカ 6:24 しかし、あなたがた富む者は哀れです。慰めをすでに受けているから。

ここでは、生前と死後のはっきりとした対比が語られており、これを読む者に死後にまで続く視点を提供する。金持ちの哀れさは、その地上的慰め（地上で良い物を受けること）が地上で終わるものであったことである。そして、貧しいラザロの幸いは、生きている間は悪いものを受けていたが、死んだ後、天の御国において、天的慰めを受けているという点にある。

この箇所から「貧しい者」への考察として言えることは、“πτωχός”が示す貧しさが確認できることと、金持ちと貧しい者の対比が、終末的視点で描かれていることである。後者の対比とは、地上で良い物を受けていた金持ちが、死後ハデスで苦しみ、地上で物乞いをするほど「貧しい“πτωχός”」者が、その死後、天において慰めを受けているという対比である。

・宴会に招かれ、それに応答した貧しい者 ルカ 14:13,21

ここでは、13³¹節は、自分を招いてくれた人にイエスが話をされた時の発言で、21³²節は、その席で客の一人が言った「神の国で食事をする人はなんと幸いなことでしょう。」(15節)の言葉に応答するイエスの発言である。それは、ある人が宴会に客を招待する話であった。

ここでも、あたかも敬虔そうに語る客の言葉が読み取れる。「幸いなことでしょう。」とは、14章14³³節のイエスが言われた義人の復活の時、お返しを受ける「幸いです。」を受けて発せられたことばであり、この客は、自分はイエスと共に食卓に招かれており、自分のことを義人の復活の時にお返しを受ける者、神の国で食事をする人であると見なして、自画自賛³⁴をしているのである。

ここで、貧しい者とあわせて列挙されている者たちは、からだの不自

由な者、足のなえた者、盲人たち、である。この列挙表は、本稿で述べた以下のマタイの句と関連している。

マタイ 11:4 イエスは答えて、彼らに言われた。「あなたがたは行って、自分たちの聞いたり見たりしていることをヨハネに報告しなさい。
11:5 目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツアラアトに冒された者がぎよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている。

また、そこで述べたようにイザヤ 35:5 以下と、29:18 以下を、61:1 以下にも、これと似た列挙の仕方が読み取れる。

彼らは、13 節においては、招かれた者であるが、「お返しができない」者として言われている。これも、“πτωχός” が示す貧しさである。

21 節においては、彼らは、宴会に招かれ、そのお迎えに応答した者として描かれている。ここで、注目されることは、この貧しい者、からだの不自由な者、盲人、足のなえた者たち以外の者も、大勢この盛大な宴会に招かれていたということである。そして、彼らは、招かれていたにもかかわらず、断ったということである。ここに、貧しい者たちと、そうでない者たちの対比がある。

「みな同じように断り始めた」（18 節）と言われており、その断った理由は、畑を買ったこと、³⁵5 ぐびきの牛を買ったこと、結婚したことなどが、その原因であった。いずれも時間的に切迫感のある断る理由としての正当さはない。アラブ諸部族の慣習として以下のような文章がある。「二度目の招待をしないのは、先の仮通知を取り消すに等しいはなはだしい無礼である。二度目の招きを断るのは、侮辱であって、アラブ諸部族の間では宣戦布告に等しい。」³⁵

以上を考えると、大勢の人は招かれていたが、その招きを断る侮辱をした者たち、と、それに応答した貧しい者たち、という対比がここでなされていることがわかる。また、地上のことが妨げとなって、神の国の

招待を断った者たちは、招待者を侮辱する者たちであるという意味もあわせて汲み取ることができる。

B. 「貧しい者」に並ぶカテゴリーにある者の考察

ここで一つ一つ取り上げて論じることができないので、以下に列挙し、「貧しい者」のカテゴリーに属するであろう者たちに共通する性質、特徴からその性質を考察する。

- ① 捕らわれ人、盲人、しいたげられている人 (ルカ 4:18)、
- ② 目の見えない者 (マタイ 9:27-31)、足のなえた者 (マタイ 21:14)、ツァラアトに冒された者 (マタイ 8:1-4)、耳の聞こえない者 (マルコ 7:31-37)、死人 (マタイ 9:18-26)
- ③ 病人 (マタイ 9:20-22)
- ④ 悪霊につかれた者 (マタイ 8:28-34、マタイ 9:32-34)
- ⑤ 罪人・・・取税人 (マタイ 9:10-13)、異邦人 (ヨハネ 4:1-42)、遊女 (ルカ 7:36-50)
- ⑥ 「幼子たち」 “νήπιοι” (マタイ 11:25)
- ⑦ 「小さい者」 “μικρός” (マタイ 18:6、10、14)
- ⑧ 「子どもたち」 “παιδίων” (マタイ 18:3、19:14)

福音書は、これらの者たちが、さまざまな境遇でイエスに出会う場面を記す。総じて彼らの共通点として挙げられるのは、当時の社会にあって弱い立場にあり、抑圧されていた点、宗教的に神の恵みから遠い存在と思われていたという点である。

・「貧しい者」に並ぶカテゴリーにある者の性質

- ① イエス・キリストに対して、心を開いて抛りすがった性質。彼らは、イエスという救済者に近づき、慕い、その呼びかけに応じ、信じ、従ったのである。
- ② 自らの欠乏を認識しており、そこから生じる救済への飢え乾きを

もっているという性質。この性質ゆえに、彼らは、そこからの救済をイエスに求め、拠りすがることができたのである。

- ③ 自らの欠乏や弱さといったありのままの姿をさらけ出して生きているという性質。自らを偽ることなく、自らの必要を与えてくれるイエスに、素直に応答した。

・「貧しい者」のカテゴリーの対照にある者の性質・・・パリサイ人、律法学者

- ① イエスを「信じず」、イエスを「訴え」、「迫害し」、イエスの呼びかけに「応じなかった」
- ② 自らの罪深さを認識していない
- ③ 自らを偽る偽善性をもっていた

ゆえに、「霊において貧しい者」が「彼ら」（天の御国に属する者）であるのは、その者たちが、自らの欠乏の認識とそこからの飢え乾きにより、イエス・キリストに素直に応答し、従う者であるからで、その者たちは、救い的手段として差し出された十字架の贖いを受け取る信仰が与えられ、神に信頼する者とされるのである。

V. マタイ 5 章 3 節の意味

A. 分水嶺となるマタイ 5 章 3 節

マタイ 5 章 3 節は、山上の説教の冒頭部分に位置する。この句は、山上の説教の入り口に当たって、聴く者を振り分ける役割を果たす。つまり、その者が、山上の説教のもつ御国性に属する者か、否か、その分水嶺としての役割を果たしていると考えられる。

山上の説教が語りかけられた直接の対象は、5 章 1,2 節にあるように、群集ではなく、弟子たちである。キリストに出会った弟子たちが、どのように歩いていくのかが、山上の説教において語られている。山上の説

教は、これを行うことができれば、救われ、御国の民となることが出来る、というものではない。この点で、救済論としての救済にいたる条件が山上の説教全体で語られているわけではない。あくまで山上の説教で語られていることは、御国の民があずかっているすばらしい特権についてである。そこに記される祝福と特権は、この世のものとは性質を異にする御国性をもっている。その御国性とは、この世に属する者の道徳的向上などによって生まれるようなものではない。ゆえに、山上の説教で語られている基準に人間の努力で達し得るものではないということである。

ゆえに、山上の説教で語られている内容のことは、キリストに出会い、救われ、御国の民となっていなければ、決してそれを行うことは出来ないという性質のものであり、それが、山上の説教の御国性である。つまり、この冒頭の句によって、御国に属する者であるのならば、そのあとの山上の説教の高い基準へと、神が引き上げようとして導かれるが、この句に、当てはまらない者にとっては、その後の山上の説教は、決して達することのできない基準、到達不可能な規範としての意味となる。

B. マタイ 5 章 3 節の救済論的理解

山上の説教全体において、救済の条件が言われているわけではないことは上に述べた。では、5 章 3 節の一節をとり扱うとなるとどうか。マタイ 5 章 3 節が、分水嶺としての役割を果たしている点に絞ってとらえるのなら、マタイ 5 章 3 節は、救済論的に理解することができるであろう。

それは、「心の貧しさ」が救いへと人を導くという意味ではない。また「心の貧しさ」を追い求めることが、救済の条件を満たしていくことではない。あくまで、ここで問題とされるのは、「心貧しい」という状態が、天の御国に入るという救いの条件を受け入れ易くするという意味である。

無論、人は、「貧しい」からといって救われるわけではない。それは、「心の貧しい者」にイエスが近づいてくださるからこそ救われるのである。そこで救われる条件は、イエスを信じることであった。いわば、救いを「受け取る」ための「貧しさ」と言える。また、それはイエスに「信頼」し、すぐること、イエスの呼びかけに応答すること、イエスに従うことを意味していた。³⁶「心の貧しい者」は、自らの困窮に直面しており、自らの欠乏の認識があるために、イエスの訪れに応答することができたのである。それに対し、「心の貧しい者」ではなかった律法学者やパリサイ人は、イエスの訪れを歓迎せず、イエスを信じるという救いの条件を満たすことはできなかった。

人は、そのままでは滅びにいたる罪人である。ゆえに、そこからの救済を求め、神に拠りすぐるしか、救われる方法はない。しかし、自らの困窮状態にない者は、神に拠りすぐることを知らない。神からの救いの唯一の手段³⁷として提供されたイエスキリストを信じることはできないのである。この点において、「心の貧しい者」たちは幸いであった。それは、神から提供された、このイエスキリストという救いの手段に、彼らは、応答することができたからである。それゆえに、天の御国は、その人のものとなるのである。

注意すべき点は、これは、イエスご自身が語っているということである。これを聞く者は、その場でイエスキリストに出会っている。すでに、その救いを提供してくださる唯一のお方を目の前にしているのである。それゆえに、「心の貧しい者」たちは、目の前にいるイエスに頼ればよいのである。「心貧しい者」が幸いとなるのは、このイエスに出会っているからであって、イエスに出会うことなしに、心貧しい者が、それだけで幸いなわけではない。

ゆえに、マタイ5章3節の救済論的理解を述べると、上に述べた意味において、「心の貧しい者」でなければ、目の前にいるイエスに信じ、拠りすぐることはできない。しかし、拠りすぐることのできる「心の貧し

い者」は幸いである。それは、神が提供してくださる唯一の救い的手段であるイエスキリストの贖いによって、「天の御国はその人のもの」となる（なっている）からである。

C. マタイ 5 章 3 節の弟子論的理解

山上の説教は、キリスト者としてのあり方、弟子としての生き方を示すものである。それは、なにより、キリストを模範とするものであり、イエス自身が、その歩みをされたといえる。この意味で、「貧しい者」であったのは、イエスである。2 コリント 8 章 9 節においては、神であるキリストが、受肉において、低い状態になられたキリストの謙卑のことが記される。人に恵みを与えるために、ご自身が進んで低い状態となられた謙卑のことを、「貧しくなる “πτωχευω”」の言葉において表現したものととれる。

また C. Brown は、福音書が描くキリストがなした「貧しい者」との自己同一化について述べる。マタイ 8:20 を例に挙げ、財産と家族の縛りからの分離というイエス自身が入り入れ、弟子たちもそれを取り入れるよう呼ばれた生活様式について述べている。そして、その生活様式は、山上の説教、中でもとりわけ 8 つの祝福を例に見られるとしている。イエスの生活様式の全体は、このように、貧しい者と旧約の貧困者の概念との意識的な同一化であるとし、これ自体が、愛のこもった憐れみの行動であるとする。そして、同時にそれは、御父の取り計らいの上にそれ自体を投じることを故意的に選ぶ³⁸のちであると述べている。

ひとたびイエスに出会い、天の御国に属する者とされた者は、その恵みにとどまり続けなければならない。言葉を変えて言うのならば、「心の貧しい者」として歩み続けるということである。これは、3 章で試みた定義に基づくならば、「自らのうちに寄る術をもたない破綻状態にあって、神にすがろうとしている者」であり続ける必要があるということである。弟子としての歩みをする者にとって、始まりは、自分のうち

に何も無いことを知ること、そして、自らのうちには滅びをもたらすものしかないことを知ることである。そして、ただ神の恵みによってのみ生かされるほかないことを認識することである。自らの行いによる謙虚さなどはなく、そのまま自分が罪人であるゆえ、ただ神にのみ信頼を置かざるを得ないという自分自身の破綻を認識することが必要である。

この点において、イエスは、その生涯において、弟子たちのプライドを砕き、自らのうちに寄る術を捨てさせ、神に信頼し、神にのみ拠りすがれることを教えられたと言える。それは、弟子たちを「心の貧しい者」として導き続けたということであり、決して、その反対の「(この世において) 富む者」「自らを誇る者」とはさせなかった。そして、神以外のものに拠りすがろうとすることを戒められたと言える。

山上の説教で言われる祝福と特権は、御国の性質と同じく、今現在与えられているものであり、また未来において完成をみるものである。よって、イエスに出会い、イエスに従う弟子となった者は、その時から始まった御国の祝福と特権にあずかり、聖化されていくのである。そして、その歩みは、やがて来る終末の時、完成を見るのである。

上に述べた、マタイ5章3節の救済論的理解とここでの弟子論的理解、聖化論的理解をまとめると、マタイ5章3節は、救いを受け取るために必要な「貧しい」状態であることの幸いを述べていると共に、救いを受けた後、地上での弟子としての歩みを全うし、その救いの完成へと歩む「貧しい者」へと弟子たちをイエスは導かれる幸いを述べているという理解になるであろう。そして、ここに、救われ、御国に属するものとなった弟子としての歩みが書かれる山上の説教の冒頭に、この5章3節が位置していることの意味を見て取ることができる。

この両方の意味において、「貧しい者」こそが、その救いに預かり、御国に属する者として引き上げられ、その生き方へと歩み、導かれていく「幸い」に預かっていくのである。

註

- 1 これについて、田川健三はこう述べている。〈貧しい者は、幸いという物言いが真理であるとするならば、それは逆説的の真理としてしかありえない。逆説的であるということは、貧しい者は決して幸いではない、という事実に対して挑戦的に抗おうとする、ということなのだ。〉田川健三『宗教とは何か』(大和書房、1988年)所収「貧しい者は幸い」P 112
- 2 新共同訳も同じ。口語訳はひらがなで「こころの」である。この点、英語の ESV や NKJV は “in spirit” また、TEV などは “spiritually” となっている。
- 3 「心」…「人間の体の中であって、広く精神活動をつかさどるものになると考えられるもの。」
「霊」…「人間や動物の体に宿って、心のはたらきをつかさどり、また肉体を離れても存在すると考えられる精神的実体。たましい。」
以上『大辞林 第二版』(三省堂、1995年)「心」P 892、「霊」P 2726 欄より。
- 4 論を進めていくにあたって、“οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι” の訳として、便宜上の理由から「心の貧しい者」(新改訳)の表現を使うこととする。
- 5 スタンリー・E・ポーター『ギリシャ語新約聖書の語法』(ナザレ企画、1998年) P 81
- 6 スタンリー・E・ポーター 前掲書 P 80
- 7 その理由は主に4つであるという。一つ目は、他の Q 資料(マタイ 11:5=ルカ 7:22)には、限定なしに「貧しい」とあること。二つ目は、Q 資料の並行法の完全性をこの限定が壊すものであること。(ルカ 6: 20-21 貧しい者は幸い。飢えているものは幸い。泣くものは幸い。) 三つ目は、はじめの「哀れ」、ルカ 6 章 24 節の「富む者」には限定がないということ。最後は、マタイは、修飾する語を付加する習慣があ

- ること (5:6a,32;6:13b;13:12b;19:9)、である。以上 W.D. Davies and Dale C. Allison Jr. , *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to Saint Matthew*, Clark 1991 P 442
- 8 荒井献、H.J. マルクス監修 『ギリシア語新約聖書釈義事典』(教文館、1994年) P 230
- 9 ウィリアム・バークレー 『山上の説教に学ぶ』(日本基督教団出版局、1992年) P 19
- 10 『旧約新約聖書大事典』(教文館、1985年) P 1116
- 11 善野碩之助は、著書の中で、これを示す以下のような具体的事件を挙げている。
- ① 紀元前 63 年、ポンペイウス将軍はパレスチナの徹底的再編成を行い、沿岸諸都市とデカポリスを設置した。その結果、通商は厳しく制限され、多くの農民が土地を失うことになった。
 - ② ヘロデ大王は広大な土地を収用し、後のそれを大地主に売却したので (『ユダヤ古代誌』17.307.355,18.2)、大規模な私有の集中化への便宜を図ることになる。その反面、多くの隷属的小作農を生んだ。
 - ③ 貧しい農民たちの反抗の動機にもなった重税。
 - ④ 凶作 (飢饉) が、小農、小作農、地方の工業者たちを苦しめた。
- 以上 善野碩之助『貧しい者は幸いか?!』(日本基督教団出版局、2000年) P 88-89 参照
- 12 Guelich, Robert A, *The Sermon on the Mount: A Foundation for Understanding*, Word Books, 1982 P 72 参照
- 13 J・エレミアス『イエスの宣教 真生シリーズ7』(新教出版社、1978年) P 227-228
- 14 善野碩之助 前掲書 P137 参照
- 15 *The New International Dictionary of New Testament Theology: Volume 2*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1969 P 822
- 16 *The New International Dictionary of New Testament Theology: Volume*

2. P 822.

- 17 荒井献, H.J. マルクス監修 『ギリシア語新約聖書釈義事典 III』(教文館、1994年) P 231
- 18 荒井献, H.J. マルクス監修 前掲書 P 615
- 19 トーレイフ・ボーマン『ヘブライ人とギリシヤ人の思惟』(新教出版社、1947年) P 277
- 20 ジョージ・E・ラッド 『神の国の福音』(聖書図書刊行会、1967年) P 20-21
- 21 ジョージ・E・ラッド 前掲書 P 22
- 22 ダヴィット・ピヴィン『イエスはヘブライ語を話したか』(ミルトス、1999年) P 87
- 23 ジョージ・E・ラッド 前掲書 P 26
- 24 2サムエル記8章20節では、「私たちも、ほかのすべての国民のようになり、私たちの王が私たちをさばき、王が私たちの先に立って出陣し、私たちの戦いを戦ってくれるでしょう。」と民が発言しているが、神によってイスラエルの国に求められた王国は、当時の周辺諸国の王国とは異なったものである。
- 25 日本語の「国家」の意味は、「王家と領土」である(『大辞林』三省堂 P 918「国家」欄より)が、語句の用いる漢字の意味からして、そこにも「国」と「家」の相関関係が見て取れる。戦時中の天皇制国家は、天皇を父とし、国民をその赤子とする国家像が組み込まれていた。
- 26 ヘブル語の“בית”は、多くの箇所では、「家族」の意味で使用されており、また現に「家族」と訳されている。
- ヘブル語には、我々が家族と呼ぶ、小さな社会単位を表すことばがない。以上
- The New International Dictionary of New Testament Theology: Volume 2.*
P 247 より。
- 27 創世記 3:5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は

知っているのです。」

創世記 3:22 神である【主】は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」

28 ここでは、構成員という視点から論じているので、無論このことが、神の国の概念全体をカバーしているものではない。

29 ルカ 20:46 「律法学者たちには気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ったり、広場であいさつされたりすることが好きで、また会堂の上席や宴会の上座が好きです。20:47 また、やもめの家を食いつぶし、見えを飾るために長い祈りをします。こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けるのです。」

30 ルカ 16:14 さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられるものは、神の前で憎まれ、きらわれます。」

31 ルカ 14:13 祝宴を催す場合には、むしろ、貧しい者、からだの不自由な者、足のなえた者、盲人たちを招きなさい。

32 ルカ 14:21 しもべは帰って、このことを主人に報告した。すると、おこった主人は、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい者や、からだの不自由な者や、盲人や、足のなえた者たちをここに連れて来なさい。』

33 ルカ 14:14 その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。

34 『実用聖書注解』（いのちのことば社、1995年）P1114

35 トリストラム『東方の慣習』P 82、『新聖書注解 新約1』（いのちのことば社、1973年）P 379より

36 信仰とは、十字架の贖いという手段を通して、神から差し出された救いを「受け取ること」と、イエスに「信頼すること」を意味する。

参考『ウエストミンスター信仰基準』（新教出版社、1994年）P 50 第14章 - 2 〈救済的信仰のおもな行為は、義認と聖化と永遠の命のため、恵みの契約に基づいて、ただキリストのみを認め、受け入れ、より頼むことである。〉

37 救いの根拠は、神の恵みである。救いを受け取る人間側の手段は、信仰であり、救いの提供者である神側の人間への救いの提供の手段が、イエス・キリストの十字架による贖いである。ゆえにここでは、「手段」と記す。ローマ 3:22,24 参照。

38 *The New International Dictionary of New Testament Theology: Volume 2*. P 825